

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	15H05709	研究期間	平成27(2015)年度 ～令和元(2019)年度
研究課題名	野生の認知科学：こころの進化とその多様性の解明のための比較認知科学的アプローチ	研究代表者 (所属・職) (令和2年3月現在)	友永 雅己 (京都大学・霊長類研究所・教授)

【平成30(2018)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる	
○	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、「人間の知性を解明する」という目的に沿って、海—陸—森といった多様な環境に適応してきた哺乳類を対象に、異なる環境に適応してきた各種系統群の動物のこころを認知科学的な手法で総合的に比較し、野生のこころの世界を詳細に研究するものである。

これまでの研究進捗においては、特に、チンパンジー、ウマ、イルカ等といった個々の対象に対して、良質な成果を上げ、専門家及び一般向けに発信していることは、高く評価できる。

しかし、個別対象の研究が中心になり、当初の目的である「森と海をつなぐ知性の進化」や「系統発生的な制約とそれぞれの種の果たした環境適応の相互作用」を探るよう研究が進行しているように見えない。また、ヒトとの比較や、まったく異なる種の間での比較認知的なアプローチが十分に配慮されているように見えない。当初の目的を、より明確なリサーチクエスチョンに落とし、明示し、それに向けた取組が必要である。

【令和2(2020)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。
A-	チンパンジー、ヒト、ウマ、イルカ等の視知覚認知に関する種々の実験により新たな知見を得るなど、良質な研究成果を上げ、専門家及び一般向けに発信していることは高く評価できる。
	一方で、個別対象の研究が中心であり、それらが本研究の主目的である「こころの進化の道筋を明らかにし、こころがそのような進化をしてきた理由を解明する」ことにどう貢献するのかが明瞭でない。また、当初掲げていた「野生と飼育下の双方向性の研究プログラムの構築」や「野生の認知科学という新しい学問領域の創生」に関しても、期待された研究成果が得られたとはいえない。